

時代小説
自選集
第一卷

照る日曇る日

大佛次郎

おさらぎ じろう じだい しょうせつ じせん しゅう
大佛次郎時代小説自選集

第一卷

て ひくも ひ
照る日曇る日

昭和四十四年十二月二十五日 第一刷

定価 八〇〇円

著者 大佛次郎

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

郵便番号 一〇四 東京都中央区銀座三の二の一

五三〇 大阪市北区野崎町七七

八〇二 北九州市小倉区明和町一の一

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

照
る
日
曇
る
日

凶兆

この夕方、程近い八幡の大銀杏の梢を夕焼に燃やして後、冴えざえと秋らしく暮れた空は明日の日和を固く約束していた。暗くなつてからも、たつたさつき外から入つて来た男は星が降りそうだといい、行燈の柔かい灯影につつまれてゐた家の中の人々にも、暗い天にしろじろと横たわる銀河の姿を肌寒々と感じさせたのだった。

それから二刻と出まい。どつと、遠音に汐騒とも思われた豪雨が、息づく間もなく襲つて来て家々の甍を鳴らし雨戸を叩いた。暫くは、膝突き合せたためいめいの話も聞き取れぬばかり轟々と、さては鳴りはためく雷に虚空も裂けるかと思われたのである。

かくすることおよそ半刻、けろりとやんだ。濡れて重い雨戸をおして開いて見ると、空は高く、外はしんとして今の騒ぎを夢かと思わせた。落ちかかる半輪の月に照らされて墓地のように町の夜は更けていた。

「魔が通つたのじゃ」

煤けた天井に眸を放ちながら、陰気な声で老婆は呟いた。乾して蔵つたばかりに慌てて引出して来て吊つた蚊帳の内で、子供達は脅えた目付をして息を殺していた。

子供達ばかりではない、大人の親達までが、何かしら不吉なものを感じていた。時折びたびたと雨後の泥濘った道を通つてゆく寂しい人の足音にも、また、その音を呑んで寂と静まりかえつた外の闇にも妙に、心を怯えさせるものがある。

× × ×

「ばあや」

優しく咎めるように、こういつた声の主の美しい姿は、円行燈の灯影に優しくつつまれて、生え際の形の好い鬢の濃い艶々と結いあげた高髻……読みさしの何かの本を膝の上に押えながら涼しい目で凝と老婆の方を見返つて莞爾したのである。齢は十六と聞く。雨に悩む初花の風情とも言えよう。いじらしいまでの優しさ、あの親爺の……といわれる父はこの市ヶ谷に一刀流指南と筆太く書いた看板を掛け、町道場ながら御府内に名のおった岩村鬼堂という老剣客、狭い汚い道場ながら五十人に余る弟子のあるのは「実ア十人が九人まで、的はあのお綺麗なお嬢様さ」と、武者窓の下に盤台置いて口きがない魚屋の若い衆の陰口だった。今夜は鬼堂は留守、がらんとした家の中に、このお妙が雇女の老婆と二人きりで、寂しく父親の帰りを待っていたのである。

「寝てはいやよ。ばあや」

「は、は、はい、……いえ、あのう……」

と狼狽して、目をばちばちやつたが、

「旦那様は？ まだお帰りでございませんか？」

「ええ、随分遅いこと！ 妾もさつきから案じていますの。今夜

は妙に犬がいやな声をして、啼くんですもの。何んだか落着かない。物騒な噂ばかりあるんですものねえ、夜はお家にいて下さらないと、お帰りになるまで心配でいけません。だのに、ばあやったらお仕事を膝に抱えて、こくりこくりおやりだもの。あたし心細くなって……」

「ほ、ほ……どうも……年を取りますと、ついだらしがなくなりまして、お嬢様、御免遊ばせ」

「いいの、謝らなくても……でも、妾、寂しかったわ、こうして独りで御本を読んでいても、妙に森と寂しくて、聞くまいと思ひながら自然と耳が澄んで、あるのかないのか判らないような音まで聞えますの。先刻も道場の間を、どうしても誰れか歩いているような、みしみしという足音や、そうかと思うと人の息のような……」

「まア、いやでございますこと。ですけれど、そんな！」

「ええ、これがお父様のおっしゃった疑心暗鬼というものなのでしようけど、余程ばあやを起して見に行こうかと思ひましたの、めら、また犬が啼いている。いやな声だこと！ お父様はどう遊ばして、こう遅いのかしら？」

二人は黙って目を見合せる。

凝と、外の気配に耳を澄ましたのである。

「どちらへ、おいで遊ばしたのでございます？」

「さア……別に何ともおっしゃっていらっしやなかったけれど、また暮のお友達のところだろうと思ひます」

「左様でございますか……それでこんなに。ほんとうにお帰になりましたらばあやがよく申上げましょう。こんなにやさしいお嬢様にお寂しい思ひをさせるなど！」

縫いさしの稽古着を膝の脇に置いて、

「ねえ、お嬢様、今度から旦那様が夜遅くおなりのような時は、どなたかにお留守番に来て頂こうでは御座いますせんか？ どなたか男の方さえいらっしやれば、それは氣丈夫で御座います」

「でも、そんな方！」

いない、といひかけたのであろう、それをばあやは遮った。

「ございますとも。お宅の直ぐそばに」

いいかけて、からかうように目を笑わせ、凝とお妙の顔を見て、何気なく美しい顔を挙げたお妙の目が、自分の視線に会つて、まごまごして、まるで眩しいものを見たように俯向いたのに、そらといひかねないばかりに勢いを得た。

「御存じで御座いますよう？ お嬢さま！」

「妾、そんな風にいわれたって判りませんの。たれのこと？」

微かな息のようにならうって、胸高にすっきりと黒天鵝絨の帯に括った袴やかな胴をくの字なりに曲げて、白い美しい襟脚を行燈の柔かい光の戯れに委せたが、さて、その雪のような肌に、薄皮一枚下を昇ってゆく淡紅の血の色が、うっすらと、香高い酒の酔いほどに散って見えたのである。

「御存じないことはございませぬ。お嬢様のおすきな方でございますもの」

「いやよ、妾、そんなこと……知らないったら！ ほんとうにはあやったら」と、上氣した顔を背向けながら声だけは邪慳にいうのを、

「あれ、お怒り遊ばしては困ります。そんな氣で申上げたのではございません」

「だって！」

「でも、ほんとうに、細木様にいらしって頂いたら……」

ばあやは、とうとうその人の名をいつて終った。

お妙は、俯向いて膝の上にひろげた本の面に、美しい髪形の影に置いていたというものの、そこに書いてある意味は固より字の形さえ、一度に泳ぎだしたようにぼんやりと霞んで、何が書いてあるのやら判らない。

「ほんとうでございますよ」年寄はくどく、

「旦那様も、見込のある若者だ、劍の素性がよいとおっしゃって、お話の出るたびに、きつと褒めておいででございますもの。

それに、細木さまもお家は近し、お父様からのお話でしたら、もう、それは一も二もなく、いらしって頂けます」

「いいわよ、ばあや。御留守番なら妾ひとりで沢山なの」

お妙が、詰めていた息をほっとさせて、こういうと、

「でも、たったさっきまでのように、あんなに……」

「いいえ、決してこわくはなかったの」

美しい目が涼しく輝いて、

「ただ、妙にお父様のことが氣になって、それに、そら何時かば

あやが話してくれたことがあるでしょう、御主人が外で死んだと知らないでお家で待っている人達に、御主人の咳ばらいが門口で聞えて、そらお帰りだと思つて開けて見たら誰れもいなくて、間もなく思い掛けず外でおなくなりになった知らせが来たとかいふ……あのお話を思い出したら、それからそれと、不吉なことばかり考えられますの。先刻、道場の床板が誰れか踏んだようにきしんだ時など、ぞつとしました」

「まア、いやでございますよ。お嬢さま、そんな……」

「でも、どんなことがあるか判らない世間ですもの。ばあや、妾、此頃つくづく生きているのがこわいような氣がすることがありますよ」

沁々とこわいものを聞いて、ばあやは吃驚したように、

「まア、お嬢様のお齡で、そんなことを！ ほ、ほ——まア、お嬢様のように、そんなにお若くつて、お綺麗で……いえ、なんとおっしゃいまして、もこりやばあやの慾目ではございません。誰れだつてお嬢様の御きりようをお褒めしない者は御座いません。そんな坊様染みたお考えなど、およし遊ばせ。お嬢様などがそれでは、他の女達は、とても生きてはいられません」

ばあやは、さも可笑しいというように笑つただけけれど、お妙の方では、にこりともしないで、反つて自分の陰氣な考えにじつと引込まれて行く様子で眉を曇らせた。

「いいえ、ばあや、それは違います」

「いいえ、違いますとも！ ばあやはお嬢様の三倍も齡を取っ

て、こんなに皺苦茶に成るまでに、そりや世間をよく見てまいりました。ばあやの申すことに間違いはございません。お嬢様のような方がお仕合せにならないで誰が倅しあわせになりましょう」

ばあやも、なかなか強氣だったが、

「そうじゃないのよ、ばあや。今はばあやの若いころと時勢が違つて来ています。御公儀の御威勢でさえ、とやこう申上げる者があるようになったのだから。それに、今にも戦が始まりそうなのぢやアないの？ それでなくとも、辻斬だの押込みだのと恐ろしいことばかりあるんだものねえ。確かに人の氣も荒く、おそろしいことを平氣でするようになっていきますもの。世間の明日もわからないというところから、自然そうなつて来たようで氣味がわるいのです」

「でも、お嬢様、お父様というお強い方が、ちゃんとおいででございます。御心配は要らないことではございませんか？」

「いいえ、お父様だって……」

お妙は、ここまで云つてから言葉を途切れさせ、淋しく微笑した。

「妾、お父様より早く死ねたら、どんなに安心だか知れないと思ひますの」

「滅相めさうもございませぬ。お嬢様、そんな……御不孝では御座いますせんか？ それに、よしんば、お父様に御万一のことがおありなさいまして」といいかけて、ばあやは勢いよく、

「お嬢様のようなお方ですもの。どんな立派な旦那様でも、お心

のままでございますわ。それを御心配になるなんて、可笑しいくらいでございます」

お妙は自然と顔を赧あからめたが、微かに口の中で、

「でも、駄目なの、ばあや」

「そりやまた、どうしてでございます」

「妾、どう考えても、自分あまり倅でなく生れて来たような氣がするの。何もかも妾の思うとおりにはなることがないように思われますの」

「そんな——」

「いいえ、いいのよ。別に心配しなくてもいいの、ただ、妾、そんな氣がするというだけのことなのです。その代り、妾、自分でも、たいていの辛いことや情ないことは齒を食いしばっても我慢して見せます。それだけの力はあるような氣がしますから。これで、妾、かなり諦めがいい方ですもの、まア心配しないでくれ」

ひどく真顔になつて、こう言われて見ると、老婆もこれまでのように笑いで胡麻化すこともできない心持で、ほんとうにこれから花も実もという方が、何故そんなに暗く世の中をお考えなさるのかと、怪しみながら氣掛りで、思わずお妙を見詰めるばかり。

元来ならば、心も身体ものびのびと晴れやかな年ごろ、なんの屈託もなく呑氣のんきにしていられはするはず、やっぱりお稚ちさくてお母様にお別れなすつたせいとか、いたいたい心持に成つて来るのだったが、わざと仰山に、

「お嬢様、ただ今おっしゃったことをお忘れになつてはいけませんよ。もう直ぐ、ばあやが、それ御覧遊ばせ、お嬢様、と申上げられるようなことになりますから。ええ、ええ、ちゃんと覚えておりますとも」

「ええ、妾も覚えていてよ」

お妙は、花が咲くようににっこりと微笑んだが、

「それにしても、お父様のお遅いこと！」

と、またしても暗い顔になる。

「なんぼなんでも、もう、お帰りでございましょう」

老婆も思わず真顔になっていいながら、再び外の気配に耳を澄ました。森として、星のある高い空に風の音を聞くばかり、夜も大分更けたらしい。

待ち伏せ

「おでん燗酒、甘いと辛い」

間の抜けた、眠そうな声で呶鳴^{なな}って、七輪の下を煽^{あお}ぐ団扇^{うちわ}の音。市ヶ谷御門に程近い濠^{ほり}端^{はた}の柳の陰。先刻の夕立を、そこらの家の軒下^{のきり}に避けて、晴れると見て出て来た、お約束の屋台店であった。

「こう、爺^{ぢやう}つあん！」

突然に声を掛けられて、おでん屋がきょろりとする。声の主ら

しい人影は、どこにも見えなかった。

「はてな？」

という顔をしたが、化かされたようで、ちょっと無気味になつたらしい。前よりも大きく、

「おでん燗酒……甘いと辛い！」やけに大きな声である。

と、また先刻の声がぐつと笑つて低い声。

「おい、野暮な声を出しなさんな。近所迷惑な。大方、もう寝入つた時分だ」

「へい……」団扇の手がやんで、

「どなたで……？ どこにおいでなンで？」

と、おっかな吃驚^{びっくり}である。

「判^わらねえかい？」は一層気味が悪い。

「嚇^{おそ}かしちゃいけません。こちらは、しがねえ商売なので」

「びくびくしたのは手前の勝手だ。こう、ここだよ」

成程、そういうわれて見ると、傍^{そば}の土堤^{どて}の、だからだと濠^{ほり}の水まで落ちる傾斜に夜風に揺られている草の間に、黒い人の頭がむつくりと起き上った。人間と判つてしまえば、それで安心なようなものだが、さて、また別の不安がある。この夜更に、露に濡れて、そんな所に寝ている男、どう考えても尋常でない。

「おでん燗酒、甘いと辛い」

と、また出る。

すると、また、

「おい、いくら呶鳴^{なな}つたって見渡したところ人通りはないようだ

な」

「何だい、お前さん、先刻から……」

老爺も、むツとしたらしい。

「おれか？」相手は、あっさりど、こう受けて、

「まあ、いい、人通りもないらしいから、そこへ出て行つて、顔を見せよう」

いいながら、さらさらと草を分けて、往来へ出て来たのは、ちよつと遊び人といった小意気な半纏姿のきりツとした若い者で、近寄つて来て、

「怪しいもンじゃねえ」こういいながら、懷中に吞んだ十手をちらりと、見せた。

「あ、旦那衆で」

「狸かとも思つたのか？ まア一本熱くしてくんねえ」

「へい、へい……それア、もう、御苦労さまでございます」

「へッ、こうだ。いやにお世辞がよくなたぜ」

といいながら、茶碗についだ酒をグツと一息で飲んで、

「うむ。今度は此方から、世辞じゃアねえが、なかなか好い酒だ、生き返つたぜ。こう、見ねえ、役目とはいい条、先刻の雨で濡れた草の中に蹲しゃがんでいるンだ。裏までぐっしり。耐つたもンじゃねえや」

「まったく……あの、何でござんす、この七輪の脇でおあぶなさいまし」

「有難てえが、そうもしていらねえ。こうしている間に、鳥の

方で、前に勘付かれてもしたら、ことだ」

「へえ。何か……？」

「爺つあんも聞いているだろう。伝馬町の質屋へ入った押込みの浪人者よ。この辺まで跟ついて来て来て後はまかれたんだ。きのう其そ奴らしいのを麻布で見掛けて又逃げられたンで、ひょっと、また、此の辺に立ち廻まわらねえかつて待ち伏せてるわけだが、どうも近ごろのように忙いそわしいのは十手を頂戴して以来ないことだ。その浪人者の外にも、三人か四人一組になつて凄ひどい奴が山の手を荒しているようだ」

「へえ、いやなこつてございますな。どうして、こう、世間が物騒おそろしなつたもんですか……おちおち商売もしていられません」

「やめるわけにも行くまいて。まアそっちの方は俺おれ達に委まかして置いて安心しているがいいやな。おツと、もう一本」

「へえ」と、新しい徳利に手を伸ばす。その間に左内坂の方角から濠端せうたんを来る人影があるのを男は闇を透し凝こと見ていたが、

「武士だ！」と呟つぶやいて、はや口に、

「爺つあん、頼むぜ。当り前の客あしらいにしていってくんねえ。迷惑は掛けねえ。うまくすると彼奴かも知れねえ！」

びたびたと雨後の道に草履の音をさせて人影は近づいて来る。岡ッ引の男は慣れたもので見返ろうともせず銚子を傾かたけて茶碗に酒をつぎながら、

「ああいい心持になつた。この勢いで、宿しゆくへでも押出おしだそうかな」

「へ、へい……」

おでん屋の老爺は、落着かない返事だ。

男は足音の加減を聞いてこの辺でよしと思つてかくると振返る。それも、初めて人が来たことに気が付いたように極めて自然な動作である。

「うーい」と、嚙をして、目だけは鋭く輝いて、今は行燈の光の中に入つて来た武士の様子を凝と見る。鉄色の羽二重の紋付を着た立派な男だが、顔は頭巾に包んであつて、年恰好もわからず、ただ頭巾の陰から光った目で、ちらりと、こちらを見返して、後は悠々と通り過ぎて行く。

(紋は下り藤か?)

こちらは胸の中で、こう頷いてから、

「じゃア爺つあん、あばよだ。仁相応にこれから揚場の川岸へ行って、引張りでもひやかすでしょう」

こう、開けっ放しな声で言つたのは、半分は今の頭巾の武士に聞かせるためであつたろう。くるりと尻を端折つて、歩き出したが、わざと、よろりと泳がせる足もと、おでん屋が真に受けて、

「あ、あぶのう御座んす」

にやりとして、二歩三歩、振返つて低い声だった。

「俺が、すこし行つたら、それ、おでん燗酒甘いと辛いを、ひと声頼むぜ。ここが性根場で大事なところよ」

足とりだけは酔った形。半町ばかり前を行く武士の後姿に凝と目をつけた。獲物を狙う獵人の目である。

武士は、こちらを並の酔漢と思つて、別に氣にかけていないら

しい。すたすたと牛込御門の方角へ歩いて行く。夜は更けていても星明りがある。他に人通りがあるのではなし構えて目さえ離さずに置けば見失うことはあるまいと思われる。

後でおでん屋が約束どおり、

「おでん燗酒、甘いと辛い」

腹が立つように、こう嘸鳴つて邪怪に団扇をばたばたやつてゐる。

何となく可笑しくなつて、くツと笑つたが、途端に急に顔色をひき緊めた。

武士は、道を左へ折れたのである。

「こいつ!」

にわかに歩調が速くなる。

武士の姿の隠れたのは、俗に幽霊坂という坂へ出る町角、角は武家屋敷の土塀、それに沿つて小走りに勢いよく道を曲つた刹那、男はぎよつとして立竦んだ。意外にも武士は、その角に隠れて自分の来るのを待つていた。ひやりとしてぱツと鳥の立つように逃げ出そうと伸びた背を追いきまに木下間に銀蛇のように躍つたものがある。

「あッ!」

と微かに叫んだのと、男の体が朽木の倒れるように路に倒れたのと、殆ど同時だった。

やや暫く手足をものがいていたが、そのまま石のように静かになった。倒れた刹那に懷から泥濘へ躍り出した十手は星明りに冷た

く光っている。

武士は切尖を地に垂れて、男の様子を凝と見詰めていたが、何思ったか、その十手を足の爪先で蹴転がして死体の脇の下へ隠れるようにしてから、身を屈めて、死人の裾で静かに刀身を拭って鞘におさめ、黙々と左右を見廻した。人に見られた様子もない。また静かに歩き出した。行手は、左右の土塀越に暗い枝を交えて、星の光を僅かに導き入れた幽霊坂。闇の底に轟々と鳴るは、先刻の雨を集めて速い溝川の流れである。

やや暫くあつて、流れの響に入りまじり坂の中腹から謡曲の音が聞えて来た。

「よもつきじよもつきじ万代までの竹の葉の酒、くめども尽きず呑めどもかわらぬ秋の夜の盃……」

今の武士に違いない。朗々と錆を含んだ鍛えた声音。その声が漸く坂を登り詰め、程なく遠く消えてから、後は、ただ水音と冷たい星の瞬き。時折、遠くの露地で、何かに怯えたように頻りと犬が鳴く……

「おッ……」

驚いたように、こういう声がして提燈の灯影が地に匍つた。牛込御門の方角から来た二人連れ。見たところ主人と供の者らしい。供の中間ていの男が、提燈を持った手を伸して、路端の死体をジッと見ていたが押潰したような声で、

「殺ったぜ。こう……」

と低い声だが主人に話し掛けるにしては酷く乱暴な口のきき方

だった。

主人と見える武士は、どちらかといえば小柄の方だったが、優形のすっきりした身にお納戸の紋服を裾長く着流して、細身の大小を落し差しにした姿が、見た目には実際よりは背が高く見えている。頭巾を眉深く被っているので顔かたちは見えないが、切長の形のいい目は男と思われず清しく、中間がかざす提燈の光に、動かぬ死体を眺めて立っている。

「辻斬かな？ ひでえことをしやがった」

中間の言葉は依然として乱暴だった。

武士が、黙って、死体が胸の下に敷いている、僅かばかり端の方を覗かせている十手を中間に指して見せた。

「え、成程」中間は頷いて、

「すると……」

「いずれ、こちらと同じ稼業の奴がやったことさ」

武士は始めて口を開いた。まさしくうら若い女の声ではないか？

『こちらと同じ稼業』と自ら言い放った。

それが女だてらのこの衣裳、尋常でない女に違いあるまいが、さりとて血を見て、びくともせぬ度胸は大胆不敵といおうか？

「忌々しい辻占だ。こいつあ、猿の兄貴がいついたとおりの、今夜は家でゆっくり寝ることでしたねえ姐御」と、いうと、頭巾の陰の美しい目が冷たく笑って、

「おや、何故さ？」

「何故って！ 出ばなを、鰐に道を突切られたも、おんなじですぜ。虫けらのような奴でも岡ッ引が殺されたとなると、この界限水も洩らさず網を張るにきまっていますからね」

「だけど、為さん」

奇怪な女は、こういって、連れを呼び掛けた。

「そうと知ったら、なおさら空手で引上げにくいよ。妾ア一人でも行つて来るつもりさ。折角目星をつけて置いた仕事だもの。また出直すというのも億劫だよ」

「相変らず気の強い！」

「そればかりじゃアない。死体を見付けたのは、妾達がそもそも初めらしいじゃないか？ これから誰れが見付けるか、騒いでから十分に手が廻るまでには夜も明けよう。お前いやならお帰んな」

「嫌だとはいひませんがね」

と不承らしい顔付で、

「何だか、今夜はあまりぞつとしませんのさ」

「判った、為さん」「へえ」

「なについて、お前、あの家の隣が剣術遣いなので、臆病風に吹かれたんじゃアないかい。一刀流指南、岩村鬼堂とか……書いてあったね、看板に。成程、名前は怖いや。だけど、そりゃ心配は要らないんだよ。よしんば岩村つて奴が加勢に飛び出して来ようが。たかが町道場の先生、それに、いくら腕が出来るつたつて飛道具にはかなわない。誰れだと思ふ、妾だよ。白峰のお銀だ」

「お銀姐さんは解っていますよ。じゃ、兎に角出掛けて見ましよう。こんなところに愚図々々していったつて、詰らない」

「お待ちな。妾が、用もなく、何時までもこんなものの傍に立っていたと思うのかい」

お銀という女は、こういって、身を屈め、死体の懷から十手を抜き取つて、懷紙を出して血や泥の汚れを拭取りながら莞爾として、

「早速、今夜の役に立てようというのさ。どうだい？」

「成程ね」

「感心してばかりいるンじゃ困るね。済まないけれど、この死骸はお濠へ抛り込んでおくれな。そうして置けば、朝まで他人に見付かりつこはない」

「まったくだ。やっぱし、姐さんには叶わない」

「ごまをすらずと、手っ取りばやくさ」

「合点」

威勢よくこういって、幾分気味悪そうに死骸の手を握り、道を斜に、濠端まで曳きずつて行つたようだったが、やがてどぶんという水音が静かな夜に陰気に響く。

「出掛けようぜ！」

お銀が、こういった。

黙つて歩いて行くところを見ると、どこをどう見ても、立派な武士。すたすたと濠に沿つて歩き出した。

暫く行つてからだだった。為というのが、

「今夜は星が綺麗ですね？」

「だけど、やっぱり山で見るのには、かなわない。もつと、もつと、ずっと澄んで寒いくらいの色をしているものねえ」

山とは、一体どこのことをいっていたのか？ 女賊白峰のお銀は始めて女らしくこういつて夢見るような目つきで空の星を見上げた。

押込み

どこかの寺の鐘が、もうとつくに九つを撞いた。秋の夜にふさわしく冴えざえとした鐘の響は、星をちりばめて澄み渡った夜空に昇って、消えた。

父親の鬼堂は、まだ戻って来ない。頻りと、それを気にしているお妙を、ばあやがやつと説き伏せて臥所へ入らせて、間もなくのこと、ごとんと裏の溝板を誰れか踏んだような音がしたので、二人が顔を見合したところへ、

「もし……お才さん……お才さん」

低い声だが、あわただしく、あからさまに恐怖の色を帯びている。お才と自分の名を呼ばれたことだし、その声が日ごろ朝夕に顔を合せて親しい隣家の質屋伊勢屋の下女の声と直ぐにわかったので、ばあやが小走りに台所へ出て、戸に手を掛けながら、

「お大さんですか？」こういうと、

「大です。……大変です。泥棒でございます」

「えっ！」

ばあやも、その直ぐ後に立っていたお妙も驚いたが、戸を開けると恐怖に泣き出さないばかりに顔を歪めた隣家の下女が、駆け込むように入ってきて来て、土間へべったりと坐って終って、

「先生様は？」

といったのは、主人の鬼堂に救いを求めに来たと見える。こちらの二人は、息をつめて黙って顔を見合せたが、ばあやが引取って、

「お留守なんですの、あいにく……で、まだ、いるンでござんすか……」

「へえ……」

傍からお妙が、「じゃア御近所を起して……」

「いえ、駄目でございますよ。騒ぎ立ててはかえって危いンでございます。白刃を抜いて……」

「……一人ですか、大勢なんですか？」

「二人御武家さまのようでございます。旦那様も御内儀さんも仲だとも縛られて、……あたし一人いるのが判らなかつたので……やつと、抜け出してまいりました」

土色になった唇で喘ぎ喘ぎ、こういうのである。こちらの女二人も、まったく、どうしたらよいものか途方にくらっていたが、年の効で、ばあやが、「あ、お嬢様、細木様にいらして頂きまし

たら」

細木といえば、先刻、幾度かばあやが名を唱えてお妙の顔に紅葉を散らさせた若者。門弟中、この道場に最も近く、つい、傍の崖下に浪人者の父親と、親一人子一人の水入らずで、つつましく住んでいたのである。

お妙は、はっとしたように反射的にいった。

「でも……もしか……？」

ばあやは莞爾して、

「そんな事はございません。大丈夫でございます。細木様のお腕前なら……」

「でも……」「まあ、ばあやにお委せなさいまし」

ばあやは、こういって、お妙をなだめてから、

「お大さん、じゃア、御一緒に、お前さんは、直ぐ自身番へ行ってお願ひ申しなさい」

「はい……」

「じゃアお嬢様、ちょっと。……声をおたてになつたりしては、いけません。静かに何事も御存じないようにしていられしやいまいしよ」

いいながら、帯を締め直して、お妙がまだ不承で何かいおうとしているのを振切るようにして、露地の間に姿を隠した。

我家ながら一人になると、お妙はにわかに譬えようもない気味の悪さが襲って来るのを感じた。ばあやが開け放して行った戸口から、今にも覆面の大男が長刀さげて、ぬッと入って来そうな気が

がする。

(お前は武士の娘じゃ)

父親の鬼堂が日ごろふた言目には必ずいうこの言葉がお妙の胸に蘇えて来た。

「父の娘として、近所の人の手前羞ずかしくないように」

こう、自分で自分に言い聞かせて、静かに奥へ引返すと、かがいしく護身の短刀を取出して帯に挟み、行燈の灯をそッと吹き消して、暗い中に立っていた。その内次第に闇に目が慣れて来て見ると外の星あかりが、家の中へもぼーッと差し込んで来ているのが判る。隣家に、現に押込みが入っているとは思われぬくらいに、ひっそりした夜である。

お妙は、ぎょっとした。またこの裏口に、ことりと確かに足音を忍んで人の近付いて来る気配である。

お妙が身構えて立っている暗い家の中を見ると、ばあやの出て行った勝手口の出口が、短冊のような形に外の星明りで蒼朧めてぱッと明るかった。その中に、六尺豊かの大男が両刀を腰に佩びてぬッと現れたのである。

お妙は息をつめた。手はおのずと胸の短刀の柄にかかる、纖弱い女ながらも岩村鬼堂の娘、相手が万一家の中へ踏込んで来たならばの覚悟であったが、これは、お妙の誤解と判った。暗い家の中を偵うような様子をしていた男は露地の方を振返って低い声で、

「年尾」と呼んだ。

年尾なら、ばあやが迎いに行つた細木の名である。その男が細木の父親であることは直ぐにわかつた。

そこへ、細木が父親の脇から首を出して、暗い家の中を覗き込んで低い声でいった。

「お妙さま」「こちらでございます」

お妙は、いそいそとして答える。

「御安心なさいませ、父も一緒にまいりました。父は今すこし前に外から帰つてまいりましたので、私も、まだ、寝ますにいたのでございます」

年尾は優しく、こう言つた。

お妙は、ただ嬉しくて、戸口まで出て、年尾の父親に無言で会釈した。年尾の父親は、五十がらみの立派な男だったが、落着いた笑顔でお妙に会釈を返してから、

「賊の方は私一人でよい。万一こちらへ逃げ込んで来ぬとも限らぬ故、年尾はこちらに残つておつて、お嬢様にお怪我のないようにしろ」

年尾は不服そうに見えたが、お妙は、こんな嬉しいことはないような気がした。

「では！」

年尾の父親は、突き入るように露地の間に姿を消した。初老の人とは思われぬ颯爽たる姿だった。

二人は、暗い中を息を殺して付んでいった。お妙はひどく駆けつけた後のように、烈しい動悸を胸に感じていた。たつた先刻、ばあや

にいろいろないわれた言葉が途切れ途切れに、前後を乱して脳裡に蘇えて来て顔を熱くしている。ぐるりの暗いのが嬉しかった。この暗の中へ雨後の夜気が静かに漂い込んで、熱した頬にひんやりと快よく触れている。

やや落着いてからお妙が見ると、年尾は、星明りを背に石を刻んだような端正な横顔を見せて立っている。勿論、父の安否を氣遣つて、隣家の物音に耳を澄ましているのだった。その広い若々しい額、秀でた眉、細く徹った鼻筋、キッと一文字に結んだ唇、お妙が、こんなに近く年尾の傍に寄つて、またかくもしげしげとその顔を見ることができたのは、まったく初めてだった。いつもは、ただ何となく羞ずかしくて、顔が微照つて、別の用で傍を通る時でも眩しくて耐らないもののように顔を背向けて大急ぎで通つて終うのだった。それから思うと何だか夢でも見ているような心持である。

「ばあさんはどうしたのでしょうか？ 帰つて来ませんか？」

年尾が、急に、振返つてこう言つたので、お妙は殆どときまぎして、口籠つた。

「は……」

こう答えてから初めて、ばあやの帰つて来ないことに何か理由が、いわば後ではあやが笑つて、『お嬢様！』と優しく肩を小突くような計画でもあつてのことのような気がして、お妙は急に顔を火のように赧くした。美しい指は、知らずして、袖をひねっている。殆ど同時に、お妙は、年尾の方でもばあやのいないことを